岐阜市立女子短期大学研究紀要第 65 輯（平成 28 年 3 月）

「哲学／レトリック」の反転の可能性について
―「真実の言説の主体化」の聴覚的実践に焦点を当てて―

The Possibility of Inverting the Dichotomy of ‘Philosophy / Rhetoric’: Focusing on Auditory Practices for ‘Subjectivation of Discourse of Truth’

中西 満貴典
NAKANISHI Mikinori

Abstract

We always have to reflect on our daily practice of ‘thinking’, because we tend to get into patterned thought, a particular way of thinking which can be characterized by dominant discourses. In this paper, we attempt to invert the dichotomy of ‘philosophy / rhetoric’, which has been deep-rooted concept since the days of Plato. Spotlighting an aural aspect of words will lead us to foreground rhetoric as philosophy. Comparing and contrasting discourses dealing with ambivalent faces of aural practices such as listening to what one says, we explore the possibility of rhetoric as the core of our intelligence, ‘ingenium’, which means human intellect that enables us to connect something to something else and results in our reasonable judgment in our complicated world.
Keywords : 思考、真実の言説の主体化、哲学、レトリック、聴覚、共通感覚、トピカ、ロゴス

はじめに

われわれは思考をつねに思考しなければならない、と考える。そのような注意をはらわないと、ある特定の型の思考に陥ってしまいかねないからである。人間は、ともすると、楽なほうへと流れていくものである。自分でものを考える（自由に考える）ことには思いのほか“負荷”がかかっている。定型化された思考（ある種パッケージ化された思考）にしたがう習性は、いわば思考のエコノミーのはたらきの産物なのかもしれない。われわれは、頭を働かせる（労働させる）ことが必要である。さもないと、われわれの頭は、いつのまにか自分のものではなくなり、自分の意志で語っているようで、実際は、出来合いの言葉（喧伝される言説）を使っているだけになってしまうからである。（そのような機構を権力者が意図的に用いることがあれば、人びとの言動は容易に操作されてしまうことは、ハンナ・アーレントが指摘しているとおりである[1]。）本稿は、このような問題意識のもとに、これまでに自明視されていた、ものの考え方の区分や傾向について再考するための一種の演習場としての役割をになう。つまり、「思考を思考する」訓練の場としての位置づけである。ここで、われわれが「思考」（＝反省、批判）の対象とするものは、「哲学／レトリック」の区分についてである。哲学とレトリックは、一般に、それぞれ独立したもの（たがいに排除的関係にあるもの）としてとらえられ、プラトン以来、レトリックに対する哲学の優位性を示す言説が支配的である。本稿においては、この「哲学／レトリック」の図式の反転（あるいは無効化）の可能性についての検討を、「思考を思考する」ひとつの応用問題として取りくむことを研究主題とする。

このような主題に対して、われわれがとる方法はつぎの二つの側面からのものである。ひとつは、「文字／声」の図式における、「声」「聴覚」といった要素に光をあてることによって[2]、「哲学／レトリック（言葉）」の図式そのものの在りようを反省的にとらえる方法である。われわれの研究上の関心は、ヴァルター・J・オング（1991）の用語を借りれば、「声の文化（オラリティー）」なるもの、すなわち、声の文化の豊饒性なるものを掘り起こすことを旨とする。レトリック（すなわち、言葉）を、たんに「文字」だけではなく「声」としてとらえ、それに対して特段の視線をむける、といういとなみを意識化する。その方法を図式的に示すならば、「哲学（優位）／レトリック（劣位）」と「文字／声」を比較対照させるアプローチであるといえよう。それによって、「哲学／レトリック」の両者の境界を解体する（哲学＝レトリック、の図式をあらたに示す）ことが実現できると期待される。それは、レトリック（言葉）の前景化のこころみにおいて、声や聴覚のはたらきを媒介させることの有効性を検証するものである。もうひとつの方法は、端的にいえば、諸言説をモザイク的にならべ置く

ことを特徴とする。それは「哲学／レトリック」の図式を構築する言説（プラトン）、あるいは、その図式の脱構築をくわだてる言説（ジャンバッティスタ・ヴィーコ）をはじめ、声や聴覚や「聴くこと」の実践にかんする諸言説を提示し、そのテクスト分析を行なう、という方法である。

これら二つの方法を、記号を用いて別様に示すならば、つぎのように表わすことができる。哲学をP、レトリックをRで置きかえれば、「哲学／レトリック」はP／Rとして表記できる。本稿での議論は、P／R を固定的にとらえるのではなく、R／P、あるいはP＝Rという組み合わせが可能であることを、「思考を思考する」ことによって検討することを旨とする。また、文字をL、声をVとするならば、L／VにおけるLは、文字を習得し文明化（？）された文化を示し、他方Vは文字以前の文化、すなわち、声が主要なコミュニケーションの媒体として機能する文化を示す。ところが、「話し言葉」(V) が「書き言葉」(L) に先立つものとしてとらえられ、言語の本質が話し言葉（V）のなかにこそ見いだされるものである、とするならば、人間の「思考」における位置づけとして、「話し言葉」(V) に対してもっと注意がむけられてもよいだろう。そこでは、L/Vの反対の図式、すなわち、V/Lが提示される。元来、P/RのRは、弁論術（＝レトリック）であり、オーラル的な要素を多分に内包していた。哲学（P）のみがロゴスを占有するものではなく、むしろR（レトリック）のなかに合理性が作用する場があるとみなし、ロゴスを受け入れることができる感覚としての聴覚・声（V）のはたらきを比較検討することの方法が浮かびあがってくる。したがって、本稿の方法は、P/Rの反転をL/Vの反転をてことして実現しようとこころみるものである。P/RにおけるPは、一見したところ、L（記述され残されたもの）と密接に関係しているようであるが、じつは、Pは、V（声、聴覚的なもの）に依存している、と見たてる。ゆえに、PにおけるVにかかる言説の検討から始めることは自然の理であろう。

哲学的修練の第一歩としての「聴くこと」

本論をすすめるにあたり、われわれにみちびきの手がかりを与えたのは、ミシェル・フーコー著『主体の解釈学』に収められているテクストである[3]。フーコーは、古代ローマ期（とくに、１～２世紀）において、哲学者たちが、「真実の言説の主体化」の修練を主題にしていることに注目している。また、その修練の第一歩が、「聴くこと」の実践として位置づけられていることに対して特別の注意がはらわれる。（フーコーのテクストのなかで、第一に「聴くこと」、次に「読むこと、書くこと」、最後に「語ること」の実践の要諦が順々に検討される。）本稿では、「真実の言説の主体化」を実現するために、一番目として重点的に置かれる「聴くこと」の問題に焦点を当てる。われわれの研究主題は、「哲学／レトリック」の図式の反転を、もうひとつの参照軸（文字／声）と比較参照することの可能性をさぐることである。検討作業の出発点として、フーコーのテクストを以下記す（『主体の解釈学』380 頁、傍点は中西による）。

> ・・・今日お話ししたいのは以下の三つのことです。まず、真の主体化としての修練的実践であるような聴取、第二に読み書き、第三に語ることです。
> というわけで第一の問題は「聴くこと」です。聴くこと、それは修練すなわち真実の言説の主体化の第一歩、第一段階です。というのも、根本的には口承的であった文化において、聴くことは、ロゴスを集めること、真について語られたことを集めさせてくれるようなものだったからです。しかし、聴取は、しかるべき方法でなされるならば、個人に対して語られる真理、個人がロゴスにおいて出会う真理について確信させてくれるようなものでもあります。そして最後に聴取は、こうして聴かれた真理、すなわちしかるべき方法で聴かれ集められた真理が、いわば主体の中にめり込み、主体にはめ込まれ、suus（彼のもの）になり始め、ついにはエートスの原型を構成しはじめることができるための手続きの第一の契機でもあるのです。アレーテイアからエートスへの移行（真実の言説から、行動の基本原則となるものへの移行）は、もちろん聴取から始まります。聴取という修練の起点と必然性は、ギリシア人が聴覚の根本的に両義的な本性として認めるようなもののなかに見いだされます。この聴覚の両義的な本性は、いくつかの文献に表明されています。

フーコーが言及しているストア派の視線（プラトン的な視線との対比による）は、主体を真理の主体として構成するような試練であり、その訓練の方法として第一番目に来るのが「聴くこと」ということになる。文字文化のなかにいる現代のわれわれが、聴くことを中心にすえる、いわゆる「声の文化」の様態を知るために有効であると思われるのは、口承文化を参照することであろう。ものを考えたり、思考を組み立てたり、「真なるもの」を追究するいとなみにおいて、聴取の重要性を前景化することが最初に行うべきことである。「根本的には口承的であった文化において、聴くことは、ロゴスを集めること、真について語られたことを集めさせてくれるような

ものだった」、という状況が前提になっている。次に指摘されるべきことは、聴取がしかるべき方法でなされるならば、「ロゴスにおいて出会う真理について確信させてくれる」、という見解である。ここで、「聴くこと」における修練の方法が適切であるかどうかという問題が存在することが予見される。すなわち、不適切な「聴かれかた」がなされるならば、聴覚がネガティブな作用をもたらし得ることを含意している。こうして、正しく聴かれる修練によって、聴取され、整理・吟味された真理が主体を構成していくことになり、「エートスの原型を構成しはじめる」、すなわち、「真実の言説から、行動の基本原則となるものへの移行」のための第一歩として位置づけられる。このような「聴くこと」にかんする特性は、聴覚の両義的な本性になかに現われる。聴取の両義性についての議論において、フーコーは、いくつかの古代ギリシア、ローマ時代の文献を提示する（プルタルコス[4]、ホメロス、プラトン、セネカ、エピクテトス）。本稿でのわれわれの主題は、口承の文化が色濃く浸透していた時代における、１～２世紀のローマにおいて哲学者のあいだで大きな関心がむけられた、「真実の言説の主体化」のための修練で第一にあげられた「聴くこと」にかんする諸言説を検討することによって、哲学（優位）／レトリック（劣位）の図式を反転（あるいは無効化）する契機の可能性をさぐることである。このような観点から、「聴くこと」の両義性にかかる諸テクストを検討する。その両義的な性質とは、ひとは聴取によって、ものの理（ことわり）をロゴスとしてとらえ理解し、みずからの主体のなかに浸み込ませ、真実を語る主体として立ち上がる、という側面があると同時に、聴覚は、ひとが本来の目的とするところへ行くことをさまたげる作用、つまり、途中の誘惑によって自分が行くべき道を見失わせる作用をもたらし得る、というアンビバレントな性質のことをいう。最初に、われわれが注目するのは、ネガティブな作用の後者の本性である。ここでの言説のなかに潜在的にあるのは、哲学／レトリックのフレームである、と見たてる。そのような仮説を本稿で検証することを始めに行う。

聴覚の受動性

最初に取りあげるテクストはセネカ著『倫理書簡集Ⅱ』（一〇八、274 頁）からのものである。少々長い引用であるが以下に示す（傍点は中西による）。

> 哲学者のもとに来る人は、日ごとに何か善きことを手に入れるべきだ。家に帰る頃には、より健全になっているか、より健全になりえていなければならない。だが、実際にそうなるだろう。哲学の力は、熱心に学ぶ人だけでなく、ただ交流をもつだけの人をも利する点にある。陽射しの中に出る人は、そのために出たわけではなくとも日焼けするだろう。香油商の店に腰かけてしばらく時を過ごした人は、その場所の香りを身につけて歩く。そのように哲学者の傍らにいた人も、怠りがちな人にさえ役立つようなことを必ず何か引き出すものだ。私の言葉遣いに注意してほしい、怠りがちな人に、であって、抵抗する人に、ではない。
> 「では、どうでしょう。私たちは、哲学者の講筵に何年も連なりながら、その色に染まりもしない人々を何人か知らないでしょうか」。むろん、私も知っている。・・・

上記テクストのなかに、哲学的実践における両面性を見いだすことができる。ひとつは、セネカのいうところの、哲学の力の一側面として「ただ交流をもつだけの人」をも利する点を前景化しているところである。真実の言説が語られ、それを「聴くこと」をつうじて、すなわち、哲学が語られる場に居合わせることによって、意識するかしないかにかかわらず、真実の言説が身体に染み入ってくる、というような利点が強調される。太陽の光や油の香りがひとの肌や鼻から身体のなかに（つまり、「主体」のなかに）入って、なんらかの作用をほどこすという機能が称揚される。「陽射しの中に出る人」は、「そのために出たわけではなくとも日焼けするだろう。」また、「香油商の店に腰かけてしばらく時を過ごした人」は、「その場所の香りを身につけて歩く。」積極的に哲学を学ぼうとするような意志をもたなくても、哲学者のそばにいるだけで（ただ、「聴いている」だけで）賢くなる、というわけだ。しかしながら、このような効用はかならずしもすべての場合に当てはまるというわけではないようである。いくら哲学者が説く真実の言説を耳にしていても、それが自分の身につかない（主体化されていかない）ようなことも起こり得るのである。つまり、「哲学者の講筵に何年も連なりながら、その色に染まりもしない人々」が存在することも、また同時に言及される。かならずしも「聴くこと」の効用のみが前面に押し出されるばかりではない。複雑なことに、「聴くこと」にかんする問題は、そこに居合わせながら、何年たっても師の言葉を理解しないということだけにとどまるものではない。セネカは真実の言説の主体化のプロセスにおいて、聴覚の受動性が、その積極的な妨害をになう側面を特段強調している。セネカ曰く、「また、学生たちの過ちによ

る失敗もある。それは、魂ではなく知性の涵養を目的として教師のもとに来る人々の場合だ。かくして、哲学（知への愛）であったものが文学（言葉への愛）になってしまった（セネカ、2006、280 頁）」。ここで言及されている、「魂／知性」の対比は何を意味するものなのか。そして、哲学／文学、つまり、知／言葉、という図式を成り立たせているものは何なのか。このような問いを検討するために、以下に記すセネカのもうひとつのテクスト（同書、284 頁）を参照することにする（傍点は中西による）。

> 私自身が別のことにかまけて文学者や文法学者に成り下がることのないように、次の点を注意しておく。哲学者の講義を聴いたり著作を読んだりすることは、幸福な人生という目的に結びつけるべきだ。そして、古語や造語とか、不適切な隠喩表現や言葉の彩を追い求めるのではなく、すぐ実地に応用するのに役立ちそうな教訓や壮大で気概に満ちた言葉を追求するようにしなければならない。そうした教えを覚え込んで、単なる言葉だったものが行為となるようにしよう。・・・

「魂」ではなく「知性」を探究するために哲学者のもとに集まる人びとが、「哲学（知への愛）であったものが文学（言葉への愛）になってしまった（280 頁）」という先のテクストに照らしてみれば、「文学者や文法学者に成り下がる」というもののいい方の前提としているところが浮き上がってくる。「古語や造語とか、不適切な隠喩表現や言葉の彩」、あるいは「単なる言葉」、と断じる形容によって示されている標的は、まさに、われわれが使っている用語「レトリック」そのものである。セネカの言は、「文学者や文法学者に成り下がる」というレトリカルなもの言いに現われているように、哲学（優位）／レトリック（劣位）の図式に符合する。この二項対立図式における優位な項として位置づけられている、「哲学」が探究するものは、ここでいう「知性」ではなく「魂」であり、それが「幸福な人生という目的」にみちびくものとされる。「哲学（知への愛）」の「知」とは、ここで提示された「知性」ではなく（知≠知性）、「魂」なのであり（知＝魂）、「真」あるいは「神」といい得るもの（知＝真＝神）と、解される。

フーコーが、聴覚に関連する文献として、セネカについで検討対象とするものはエピクテトスである。エピクテトスの聴覚の受動性について、フーコーは興味深い言及を行っている。以下引用する。「エピクテトスはロゴスを受け入れることができるような感覚としての聴覚から出発し、それじたいが両義的であることを示します。すなわち、聴覚というロゴス的な（能動的）活動にも、必然的に受動的な何か、必然的にパトスの次元にある何かがあり、そのために真理の言葉の聴取を含むすべての聴覚がいささか危険なものとなるのです（フーコー、2004、384 頁、傍点は中西による）。」さらにフーコーは、エピクテトスの「聴くこと」にかんする両義性について説く。「エピクテトスは言います。『ひとは言葉や教訓によって完成の域に達する』。したがって、ロゴスを聴き取り、パラドシス paradosis すなわち教訓や口伝を受け取ることが必要です。ところがこのロゴスやパラドシスはいわば生の状態では現れることができないとエピクテトスは言います（同書、384 頁。傍点は中西による）。」ここでいわれるところの、「生の状態では現れることができない」とは、「真理が聞き手の魂まで至るためには、それが発話されなければならない。そして発話するためには、言葉そのものとその言説的な組織に結びついたいくつかの要素が必要である（同書、384 頁）」ためである。つまり、レクシス（表現法）や意味論的な選択が求められるのである。「真理」という抽象的な概念は、言葉という具体的な媒介物にのせて運ばれなければならないというわけである。しかしながら、同時に、「真理」を言葉によって「聴くこと」における危険性も指摘される。「真理はロゴスやパラドシス（言説や口伝）によってしか語りえないものであり、また、この口伝はレクシスや意味論的な選択に訴えるものなのですから、聞き手は語られた事柄だけでなく、その要素すなわちそれを語らしめる要素だけに注目してしまう危険があるのです。聞き手は捕らえられ、そこにとどまってしまう危険がある、と彼（＝エピクテトス[中西注]）は言います（同書、384－385 頁。傍点は中西による）。」フーコーはエピクテトスの言を借りて、「聴くこと」の受動性の陥穽について注意をうながす。ここで言われている「語られた事柄」とは、先に述べたセネカの文脈にしたがえば、「真実の言説」、つまり「真理」といえるものである。そのような「真理」は「知」であり、また「魂」でもあり、「単なる言葉」ではなく、まさに哲学がになうべき対象とされている。その意味で、「哲学（優位）／レトリック[＝言葉]（劣位、あるいは二次的なもの）」のフレームじたいは、そのままが踏襲されている。しかしながら、「語られた事柄」（＝真実の言説）は、実際には、生（なま）のままではひとに伝えられないのであり、あくまで、コミュニケーション・メディアと称すべき伝達媒体（＝言葉）にのせて伝える方法しかわれわれには頼るべきものはな

いのである。エピクテトスは、このような「真理」の伝達のための媒介物そのものに内在する魅惑力に対して、われわれの注意をむけさせる。「語られた事柄」、すなわち、真実の言説を「語らしめる要素だけに注目してしまう危険」性に対して特段の警告を発する。このような、言葉のもつ魅力とその危険性にかんする、エピクテトスの「旅館」の喩えのくだりを以下引用する（エピクテートス、1958、232-233 頁、傍点は中西による）。

> ところで起こっていることは何であろうか。それはちょうど人が自分の郷里へ帰ろうとして、綺麗な旅館に泊った時、その旅館が自分に気に入ったので、その旅館にとどまるようなものである。ねえ君、君は君の目的を忘れたのだ、君はここに旅をしたのではなくて、ここを通過するのだ。「しかしこれは素敵だ。」だが他にどれほど多くの素敵な旅館があり、どれほど多くの素敵な牧場があることだろう。だがそれは単に通過するものとしてのことだ。君の当面の目的は、郷里に帰り、身うちの者に安心させ、自身市民の義務を履行し、結婚し、子供をつくり、普通の職につくことである。というのは、君はわれわれにとって一層素敵な場所を選ぶために、この世にやって来たのではなく、君の生れた、そして市民となるように定められたその場所で、生きるためにやって来たのだからだ。今の場合でも起こることは何かそのようなことである。つまり人は言葉やこのような教訓によって、完成の域に達し、自分の意志を純粋にし、心像の使用能力を正しくすべきであるし、またその教訓は必然或る原理や或る性質の表現法によらざるを得ないし、また原理も種々雑多で、ぴりっと来るものを伴っているものであるから、或る人たちはそれらによって捕えられ、それにとどまるのだ、つまり或る人は表現法により、或る人は推論により、或る人は議論の転換により、或る人は何か他のこのような旅館によってとどまり、あたかもセイレーンの処にとどまるようにとどまって朽ち果てるのである。

われわれは上記テクストを、「目的―手段」の関係図式にもとづいて読み解くとしたら、どのようなことがいえるのだろうか。「目的」とは、フーコーの文脈でいえば、哲学者が「真理」や「真実の言説」に到達し、それを主体化することであり、魂の修練の結果、達成されるべき位相である。しかし、これにいたる道程において、誘惑が待ち受けている。上記引用テクストの表現を借りれば、自分の郷里へ帰ろうとする人をつかまえて、次のように注意をうながす。「ねえ君、君は君の目的を忘れたのだ、君はここに旅をしたのではなくて、ここを通過するのだ。」その人にとっての当面の目的とは、すなわち、「郷里に帰り、身うちの者に安心させ、自身市民の義務を履行し、結婚し、子供をつくり、普通の職につくこと」を指している。そのような目的のために、郷里へ向かう旅をしているのであり、また、その道中において、たまたまある「綺麗な旅館」に泊っているのである。「旅」とか「旅館」は、あくまで目的地に到達する（つまり（目的を達成する）ための手段である。言葉についても、目的を達成するための手段という意味では同様である。より一般的かつ抽象的な表現でいえば、「人は言葉やこのような教訓によって、完成の域に達し、自分の意志を純粋にし、心像の使用能力を正しくすべきであるし、またその教訓は必然或る原理や或る性質の表現法によらざるを得ないし、また原理も種々雑多で、ぴりっと来るものを伴っているものであるから、或る人たちはそれらによって捕えられ、それにとどまるのだ（傍点は中西による）」、と表わされる。ここで言及される「表現法」こそが「言葉」（あるいは、レトリックとでもいわれるもの）である。言葉（表現法、レトリック）は、ひとを魅了し、ひとの心を捕えてしまい本来の目的を忘れさせる性質を有するとされている（郷里への道中に泊った綺麗な旅館をたいそう気に入って、そこに留まりつづけ、郷里へ行く目的をすっかり忘れてしまう人のように）。まるで、「或る人は表現法により、或る人は推論により、或る人は議論の転換により、或る人は何か他のこのような旅館によってとどまり、あたかもセイレーンの処にとどまるようにとどまって朽ち果てるのである（エピクテートス、1958、233 頁）。」セイレーンは、よく知られるように、ホメロスの『オデュッセイアー』に出てくる海の妖精（魔女）である[5]。妖精が歌うのを耳にしてしまうと、その歌に魅せられ、自分のやるべき仕事（故郷イタケへの帰還という目的）を見失ってしまい餓死させる。それはまさに、郷里へ向かう目的を忘れ、「綺麗な旅館」（ホメロスの叙事詩ではセイレーンの甘い歌声）に魅了され、みずからを見失うさまと同様である。言葉（表現法、レトリック）は、ひとを誘い惑わせ、本来の目的や「真なるもの」から遠ざけるものとしての性質が強調され警戒される。フーコーは、「聴くこと」、聴覚において、プルタルコスにもとづき、「聴覚はすべての感覚の中でもっともパテーティコス pathētikos であると同時にもっともロギコス logikos である（380 頁）」、と述べ、まずは聴覚のパテーティコスな側面を前景化させる。このような言

語観の背後には、プラトンによるフレーム、すなわち、「本物」が第一次的に在って、「言葉」は、「本物」の影のような二次的な存在でしかなく、言葉（＝レトリック）によっては、「真理」には到達しえない、という考え方が潜んでいるといえる。フーコーはまた、「プラトンが詩人や音楽について何を言っていたかはご存じでしょう（381 頁）」と付言している。本稿におけるわれわれのくわだては、「哲学／レトリック」の二項対立図式の反転をこころみることであった。その研究主題をふまえ、哲学／レトリックにかんするプラトンの諸言説を参照することによって、「聴くこと」のパテーティコスな面との関連について比較検討をおこなってみたい。

「本物／言葉」言説

プラトンの『クラチュロス』において、「本物／言葉」の図式が以下のように描かれている（156-157 頁、435D-E。そこでは、「言葉」は「名前」という言い方におきかえられている。傍点は中西による）。

> **クラチュロス**　名前は教える〔教示する〕のだと、ぼくには思えます、おおソクラテス、そしてこれは絶対的に言えることですが、名前を知るであろう人は、事物をも知るのです。
> **ソクラテス**　君が言おうとしているのは、おおクラテュロスよ、多分次のようなことなんだろうね。すなわち、だれかが名前がどのようなものであるかを知ったときには――ところで名前は当の事物とまさに同じようなものである――その人は当の事物を知ったことになるであろう。なぜなら、それは名前に似ているのであり、そして互いに似ているすべてのものについては、無論同じひとつの技術〔学問〕で足りるのであるからと。まさにこの意味において、君は、名前を知る人は事物をも知るであろうと言っているように、ぼくには思えるのだがね。
> **クラテュロス**　実にそのとおりです。

クラテュロスとソクラテスとの対話において、クラテュロスは「名前を知るであろう人は、事物をも知る」との見解を提出する。すなわち、言葉（＝名前）を知ることによって、事物（＝真理）の探究が可能になるのではないか、という考えを示したのである。それに対してソクラテスは、そのような物言いを吟味し批判していく（157 頁、435E～436A、傍点は中西による）。

> **ソクラテス**　まあ待ち給え。この、君が今言っている、事物教示の方法が、いったいどんなものか、見てみようではないか。つまり、他にも方法はあるのだが、これの方がもっとすぐれたものであるのか、それともこれ以外にはありもしないのかをね。君はどちらだと思うかね。
> **クラテュロス**　あとのようにだと、ぼくには思いますね。他に方法は全然なくて、これが唯一でもあり、最良でもあるのです。
> **ソクラテス**　だが、どちらだね、有るものの発見もまた、その同じ方法によるのかね。つまり、名前を発見した人は、名前がそれの名前であるところのかのもの〔有るもの〕をも、すでに発見してしまったわけなのだろうか。それとも、〔事物を〕探求し発見することは、別の方法でなされねばならないのであって、他方学ぶことはこの〔名前を通じての〕方法でなされるべきなのかね。
> **クラテュロス**　もちろん何よりも確かに、探求も発見も、同一のものに関するかぎり、この同じ方法によってなされるべきです。

「有るもの」、すなわち、「名前がそれの名前であるところのかのもの」の指すものとは、いわゆるプラトンのいうところの事物の本質、イデアに相当する概念であり、かつ、真理でもあり、これが第一次的なものとされる。このような「有るもの」（＝真理）を発見するためには、「有るもの」を指す「名前」による、すなわち、言葉によるものであるのかが、批判的に検討される。事物を探求したり発見したりすること、究極的には、真理に到達するための方法としてはたして「名前」を媒介させることは可能なのか、の問いが提出される。プラトンはソクラテスの言を借りて、「名前」に依るのではない方法で「有るもの」を知ることの可能性を追究する姿勢を示すために、「名前」すなわち、言葉の限界をあかるみに出そうとする。「名前どうしが仲間割れをして、双方がそれぞれ自分たちこそ真理〔実相〕に類似するものだと主張する（プラトン、2005、164 頁、438D）」、という真理探究のための手段としての「名前」の欠陥を難じて、「名前以外の何か別のものを求めなければならない（同書、164 頁、438D）」という立場を明言する。「名前」と「名前以外のもの」の対比によって、「名前」を依る方法に負のイメージが付与されることに貢献するような、問答のしかた（いわば、レトリック）がなされていることについても付言しておきたい。すなわち、「どちらの学び方が、より精密なものなのだろうか。つまり、模写品に依ってこれ自身がうまく似せられているかどうかを学ぶとも

に、またこれがそれの模写品であったところの実物をも学ぶということの方がそうかね。それとも、実物に依って、これ自身を学び、かつこれの模写品が似つかわしく作り上げられているかどうかをも学ぶことの方がかね（165 頁、439A、B、傍点は中西による）。」このようなソクラテスの問いに対して、クラテュロスは、「それは実物に依る方法であるのが必然だと、ぼくには思えます（同書、165 頁、439B）」、と答える、あるいは答えざるを得ないようにいざなっている、とも解される。なぜならば、ソクラテスの言述のなかには、顕在的には、「実物／模写品」のいい方を示し、また他方では（潜在的には）、二項対立図式（前者の項を優位、後者の項を劣位と配置する）が、皮肉にもレトリカルな言い回し（つまり、「実物」や「模写品」という言葉の提示）によってきわだたせているからである。

このように、言葉は実物や本物を言い表すたんなる代用物にしかすぎない、という言語観を、プラトンは執拗にまでくりかえし提出する。『パイドロス』において、弁論術に対する批判（レトリック・言葉への攻撃）を展開するうえで、「真実そのもの／真実らしく語ること」の図式を提出する。「真実らしく語ること」すなわち、言葉を駆使する弁論術（レトリック）が、いかに「真実そのもの」から、人を遠ざけるものであるのかが描かれる（プラトン、1967、137 頁、276A、傍点は中西による）。

> **ソクラテス**　では、どんなものだろう。この書かれた言葉と兄弟の関係にあるのが、しかし父親の正嫡の子であるもうひとつの種類の言葉について、それがどのようにして生まれるのか、またこの書かれた言葉とくらべて、生まれつきどれだけすぐれ、どれだけ力づよいものであるかを、見ることにしようか。
>
> **パイドロス**　とおっしゃると、それはどんな言葉のことでしょうか。またどのようにして生れる言葉なのでしょうか。
>
> **ソクラテス**　それを学ぶ人の魂の中に知識とともに書きこまれる言葉、自分をまもるだけの力をもち、他方、語るべき人々には語り、黙すべき人々には口をつぐむすべを知っているような言葉だ。
>
> **パイドロス**　あなたの言われるのは、ものを知っている人が語る、生命をもち、魂をもった言葉のことですね。書かれた言葉は、これの影であると言ってしかるべきなのでしょうが。
>
> **ソクラテス**　まさしくそのとおりだ。・・・

プラトンの提示する「本物／言葉」のフレームは、上記引用テクストに顕現している。「本物／言葉」で配置された「言葉」は、「書かれた言葉」として表現され、「本物」は、「もうひとつの種類の言葉」として言い表されている。（後者の、言葉のほうは、いわゆる一般的な概念としての「言葉」ではないことに留意する必要がある。）そのような言葉は、「真実そのもの」に相応し、「ものを知っている人が語る、生命をもち、魂をもった言葉」のことである。それは、「真実らしく語ること」、すなわち、弁論術（レトリック）に対置される概念（＝イデア）である。したがって、本物は、「ものを知っている人が語る、生命をもち、魂をもった言葉」のうちに存在するものであり、「書かれた言葉」は、本物の影、すなわち、本物や実物の代用物として位置づけられている。

このような「書かれた言葉」（＝エクリチュール）が作用する好ましからざる（とプラトンが考える）事例がいくつか示される。「言葉というものはひとたび書きものにされると、どんな言葉でも、それを理解する人々のところであろうと、ぜんぜん不適当な人々のところであろうとおかまいなしに、転々とめぐり歩く（プラトン、1967、136 頁、275D、E）。」このように、「書かれた言葉」は、文字自体が独自の生命をもっているかのようにふるまい、人間のコントロールのきかない性質をおびてしまう、という懸念が呈される。また、「書かれたものの中から何か明瞭で確実なものを掴み出すことができる（同書、136 頁、275C）」、と信じる人は、たいへんなお人好しと揶揄される。ここで言われるところの「何か明瞭で確実なもの」こそが、「真実なるもの」「有るもの」「本物」としてすえられている第一次的な概念である。さらに、「書かれた言葉」、すなわち、「文字」は、人間の記憶力（＝頭の働き）を劣化させる作用が潜んでいることについて警告をする。エジプト全体に君臨していた王の神、タモスが、文字の発明の神テウト（文字によって人は、もの覚えが良くなると、記憶と知恵の秘訣を説く）、に向かって次のように言う。「あなたは、文字の生みの親として、愛情にほだされ、文字が実際にもっている効能と正反対のことを言われた。なぜなら、人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人たちの魂の中には、忘れっぽい性質が植えつけられることだろうから（同書、134 頁、275A、傍点は中西による）。」さて、「哲学／レトリック」の構図におけるレトリック批判の言説は、「本物／言葉」に潜む言語観にもとづいてきたことは、これまでの諸言説をつうじて見てきたとおりである。批判の対象は、本物に対して影のようなものの存在としての「言葉」であ

った。この「言葉」概念は、声や文字の両方を包含するものであって、とくに両者の区別なく「言葉」という用語が使われてきた。先に、「書かれた言葉」に対するプラトンの批判をみてきたが、そのあと、「文字」一般にかんするプラトンの言説を提示してきた。このような文字による人間の記憶力におよぼす負の影響について、中島敦は、短編「文字禍」のなかで、「文字の精霊」の人間に対する作用を描いてみせている。「近頃人々は物憶えが悪くなった。これも文字の精の悪戯である。人々は、もはや、書きとめておかなければ、何一つ憶えることが出来ない（中島、2008、195 頁）。」本稿において、文字の霊が引き起こす数々の負の作用のなかで、文字は本物の影にすぎないとみなす思想、すなわち、「本物／言葉」観のプラトン言説を再補強する言述の構造について検討をこころみる。短編「文字禍」は冒頭の「文字の霊などというものが、一体、あるものか、どうか（同書、190 頁）。」、という問いから話しが始まる。アッシリアのアシュル・バニ・アバル大王によって、この文字の霊についての研究を命じられた、老博士ナブ・アヘ・エリバは次のようなことを明らかにした（中島、2008、194-195 頁、傍点は中西による）。

> 文字を覚える以前に比べて、職人は腕が鈍り、戦士は臆病になり、猟師は獅子を射損なうことが多くなった。これは統計の明らかに示す所である。文字に親しむようになってから、女を抱いても一向楽しゅうなくなったという訴えもあった。＜中略＞ ナブ・アヘ・エリバはこう考えた。埃及人は、ある物の影を、その物の魂の一部と見做しているようだが、文字は、その影のようなものではないのか。
>
> 獅子という字は、本物の獅子の影ではないのか。それで、獅子という字を覚えた猟師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙い、女という字を覚えた男は、本物の女の代りに女の影を抱くようになるのではないか。文字の無かった昔、ビル・ナビシュチムの洪水以前には、歓びも智慧もみんな直接に人間の中にはいって来た。今は、文字の薄被をかぶった歓びの影と智慧の影としか、我々は知らない。・・・

上記テクストにみられるように、老博士ナブ・アヘ・エリバは、次のような仮説を立てている。「埃及人は、ある物の影を、その物の魂の一部と見做しているようだが、文字は、その影のようなものではないのか。」エジプト人の見たてと同じく、プラトンが提示する「本物／言葉」「本物／影」の図式がここにおいても確認することができる。実体としての、本物の獅子や本物の女に相応するもの（似せるもの）として、「獅子」「女」というような言語記号（＝文字）を覚えた男は、実在の獅子や女に対して、これまで振る舞っていた行為の感覚を狂わされてしまっている喩えが説得性をもって描かれている。文字（＝言葉）は、「本物」「真実なるもの」「有るもの」という第一次的な実在物を写すたんなる影、媒介物、すなわち、代用物という二次的なものとしての位置づけが強く刻印されていることが印象づけられている。この言説じたいの内容が、全面的な「真」であるかどうかについては留保するが、文字、言葉、記号全般にかんする真理のひとつの側面として、いったん受け入れることにするならば、そのような仮説（「本物／言葉」）が示す言語文化世界のなかで、われわれは社会生活をいとなんでいかざるをえなくなる。そのような場所において、「本物／言葉」という図式における劣位の項に配置された「言葉」に対して、いかなる姿勢でのぞんだらよいのか。

レトリックおよび聴覚のロゴス的機能

本稿は、「哲学／レトリック」のフレームの反転をこころみることを旨としている。論考の入り口において、古代ローマ期における哲学者たちの「真実の言説の主体化」の修練の第一段階としての「聴くこと」の両義的な本性のうち、聴覚の受動性、すなわち、パテーティコスな側面の諸言説をみてきた。次に検討すべきは、「聴くこと」のもうひとつの重要な側面、ロギコスな面への注目、しかるべき方法で聴く修練を前景化してみることである。そのこころみは、「哲学／レトリック」、換言すれば、「本物／言葉」における、「レトリック」や「言葉」が内包するロギコス性を掘り起こして可視化させることでもある。ジャンバッティスタ・ヴィーコ（1668-1744）は、当時隆盛をきわめていたデカルト哲学に対してレトリックの重要性をひそかに説いていた。それは、プラトン以来の言語観「哲学／レトリック」の図式を反転させ、レトリックの重視性を強調する意図がこめられていたといえるものである。ヴィーコは、その著『学問の方法』における「道徳と政治の学および雄弁にもたらす不都合」（56-74 頁）のなかで、「本物／言葉」とでもいえる図式を転覆させる論考を展開している。そこでは、学識と賢慮を対比させ、学識はあるが賢慮を欠いている者たちを批判する。人が正しくふるまうかどうかについて、「知識「学識」を用いる判断の方法と、「賢慮」（＝共通感覚のようなもの）を用いる方法において、前者の問題点の抽出を行っている（同書、61 頁、傍点は中西による）。

> 実際、彼ら（＝学識はあるが賢慮を欠いている者たち[中西注]）はものごとを真っ正直な考え方をもって判断するが、人間は大部分が愚か者であって、熟慮したうえで行動するようなことはなく、ただ欲望のおもむくままに、あるいは運にまかせて行動しているのである。また、彼らはものごとを、それらはそうであってしかるべきであったのだと判断するが、ものごとはたいがい無鉄砲に行われているものなのである。ところが、彼らは共通感覚を磨いておらず、また真らしく見えるものに従ってきたことも一度としてなく、もっぱら真理だけで満足しているので、その真理について次には人々は共通に何を感じとっているのかということには、いわんや、それがはたして人々にも真理と見えているのであろうかといったようなことには、まったく無頓着である。

上記引用テクストにおける、「学識」に対置される「共通感覚」がつかさどるものは、「真らしく見えるもの」である、といえる。プラトンの図式において、第一義的に強調される「真実そのもの」の下位に位置づけられる項である、「真実らしく語ること」、あるいは「書かれた言葉」など、弁論術、すなわち、レトリック（言葉）の位相に属するものである。ヴィーコは、プラトン以来、哲学の下に甘んじ、第二次的なあつかいを受けてきた、弁論術（レトリック）の復権を暗にくわだてているかのようである。また同時に、ひそかに、デカルト哲学に対する異議申し立ての意図が垣間みえる。「新しいクリティカの不都合」（ヴィーコ、1987a、26-37 頁）において、ヴィーコはデカルト哲学を「新しいクリティカ」として見たてて、とくに教育上の観点からの不都合を描出している（26 頁、傍点は中西による）。

> そこで何よりもまず学問の道具に関してであるが、われわれは今日学習をクリティカから始める。その第一真理をあらゆる虚偽だけではなく、虚偽の嫌疑からも浄化するために、あらゆる二次的真理とかあらゆる真らしいものをも、虚偽と同様に、知性から追放することを命ずるクリティカからである。
>
> だが、こうすることには不都合がともなう。というのは、青年たちにあっては、長じてからの実生活において奇妙で異常な結果にならないように、できるだけ早く共通感覚〔常識〕が育成されるべきであるからである。ところで、知識が真理から、誤謬が虚偽から生まれるように、共通感覚は真らしいものから生まれるのである。・・・

ヴィーコは、これまでの思考の慣習が、「真らしきもの」を、虚偽と同じカテゴリーに押し込めてしまってきたことを批判する。人間社会のいとなみは、「第一真理」なる原理のみでうごいているのではなく、実際のところ、われわれは混沌とした不条理にみちた世界のなかに放り込まれている、という考え方に立っている。ヴィーコは、先の「哲学／レトリック」に示されるとおり、人間社会を次のように見たてている。「人間は大部分が愚か者であって、熟慮したうえで行動するようなことはなく、ただ欲望のおもむくままに、あるいは運にまかせて行動しているのである。」また、「ものごとはたいがい無鉄砲に行われているものなのである。」このような人間観にしたがって、不完全に見える社会のなかでのいとなみをするうえで、人々が修練すべきことは、「共通感覚」（ここでいう、常識）の育成である。青年の教育において、まず行うべきはこのような側面であることが強調される。そして、そのような「共通感覚は真らしきものから生まれる」と洞察している。その意味で、「真らしきもの」は虚偽の仲間に入れて捨て去られるべきものではなく、それは、共通感覚を育成するための貴重な資源なのである。したがって、実社会における事柄を学問の対象にすえるにあたり、まず最初に重点をおくべきことは、いわゆる「第一真理」ではなく、「真らしきもの」に対してであるといえる。すなわち、問題として立ち上がらせるべきものは、「真実そのもの」ではなく、むしろ「真らしいもの」や「真らしく語ること」である。換言すれば、着目すべきは、「本物」というものよりも、むしろ「言葉」であるといえる。それは、『パイドロス』のなかで言われているところの、「書かれた言葉」、「本物の影」に当たる領域に向き合うことを求めているのである。この点について、とくに公的な場面における重要性を例証するために、ヴィーコは、1588 年、フランス三部会が開かれている最中に起きたギーズ公暗殺事件を取り上げている。その事件の報を受けた、枢機卿ルドヴィーコ・マドルッツォは、次のごとく述べたとされる。「君公たらんとする者は単にものごとが真実で正しくあるように心がけるだけでなく、そのように見えるようにも心がけなければならない（ヴィーコ、1987a、62 頁、傍点は中西による）。」人間は、いつも理性にしたがって生きているのではなく、思い違いや無鉄砲で恣意的に行動したりする習性があるとすれば、そこで有効なのは、ものごとの真実が、その真実性そのものが「そのように見える」ように努力するということの＜真理（＝哲学）＞が重視されねばな

らなくなる。ここではもはや、本物／言葉、哲学／レトリックの区分が無効化される。哲学が哲学であることを条件づけるのは、まさにレトリックの存在である、ということになる。それゆえ、「レトリック即哲学」というもの言さえもがみちびかれうることになる。「真なるものは作られたもの」とするヴィーコの命題（ヴィーコ、1987b）にしたがえば、「真なるもの」を特権視することは、もはや留保せざるをえなくなる。そこでは、「真なるもの」と「真らしきもの」を分け隔てていた境界線は取り払われてしまう。むしろ、われわれが関心を向けるべきものは、「真らしいもの」であり、それは「言葉」（＝レトリック）の次元を真正面からむき合うことを意味する。実社会において、弁論（＝真らしいことを語ること）によって人の心をとらえるためには、あらゆる論点に通じていることが必要とされる。したがって、「キケロをたくさん些細なことを言ったかどで非難するのは正しいことではない。なれなら、彼は、法廷、元老院、とりわけ民衆の集会において、それら些細なことによってこそ優勢をほこったからである（ヴィーコ、1987a、31頁）」、とヴィーコが言うように、「真らしいもの」への注意の重要性が強調される。ゆえに、教育の順序は、「真らしいもの」を「真理」の先立って教えられるべきであるとされる。ヴィーコの言はつづく。「青年たちは全体的な判断によってあらゆる学芸を教えられるべきである、と私は思う。それゆえ、彼らはトピカのトポスを豊富にし、そしてその間に賢慮と雄弁のための共通感覚を増大させ、想像力とか記憶力を鍛えて、これらの知性の能力によって支えられている諸技芸のために準備すべきである。次いでクリティカを学ぶべきである（ヴィーコ、1987a、35頁、傍点は中西による）。」では、ここで言われるところの、賢慮や共通感覚を養うための修練は、いかなる方法がとられるべきなのであろうか。すなわち、「想像力とか記憶力」を訓練するためにはどのようなやり方がよいのであろうかという問題が浮かび上がってくる。ホルヘ・ルイス・ボルヘスの短編（「書物崇拝について」205頁）で言われるように、もともと「書き言葉」は、たんに「話し言葉」の代用品でしかなかった、との言語観にしたがえば、語られていることを「聴取」するいとなみの側面に注意が向けられることが必要になってくる。そこでは、第一義的に在るのは、「話し言葉」によって構成される時空間、つまり、ヴァルター・J・オングの言を借りれば、声の文化（オラリティー）であって、次いで在るのは、文字の文化（リテラシー）、つまり、「書き言葉」によって織り成されている領野である。われわれの共通感覚を育成するために、多くの「真らしいもの」を素材にして、まずは、「想像力や記憶力を鍛えて」いく実践が求められる。そのためには、先に述べたところの、「聴くこと」に依ってロギコス性を修練する、という実践の方法が追求されなければならない。キケロへの言及で指摘された、トポス（論点）、換言すれば、「真らしいもの」にかんする言説、を記憶しておくことや想像することにおいて、古代人はすぐれているという趣旨のことをヴィーコは語っている。有名なピュタゴラス学派の伝承を引用して、ヴィーコ曰く、「こういったものごとにおいては、古代人はわれわれよりもすぐれているように私には思われる。というのも、ピュタゴラスの徒は五年間ずっと沈黙を守り、その期間には教師の証言、師はこう言われた、のみによって聴講したことを擁護したからである。また一般に哲学の新参者の主たる任務は聴くことであった。そこから彼らは固有の術語によって聴講生と呼ばれたのであった（ヴィーコ、1987a、36頁、傍点は中西による）」、と。フーコーが、ロギコスな感覚として聴覚を位置づける、エピクテトスのテクストを検討したことについては、すでに述べたとおりである。「エピクテトスはロゴスを受け入れることができるような感覚としての聴覚から出発し、それじたいが両義的であることを示します（フーコー、384頁）。」このようなロゴスは、生（なま）の状態では現われることができない、すなわち、「言葉」という衣に着せて示すことによってしか、われわれはそのロゴスをとらえることはできない。真理はロゴスによってのみ語りうるものである、と同時に、しかるべき方法で、それを「聴くこと」が求められる。語られる言葉や表現という要素（レトリカルな要素を多分にふくむ）だけに注目し、そこにとどまってしまう危険が待ち受けていることは、先に示したとおりである（エピクテトスの「旅館」の喩えや、ホメロスの「セイレーン」を通じて）。

哲学的修練としての「聴くこと」の実践の意義

さて、「話し言葉」が「書き言葉」に先立ち、後者は前者の代用物でしかない、という立場に立てば、師が話すことを専ら「聴くこと」を由とするピュタゴラス学派の方法について検討することは、聴覚のロギコス性をあかるみにする契機を与えてくれることが期待される。イアンブリコスによる『ピュタゴラス伝』の当該テクストを、少々長いが以下に示す（71頁、傍点は中西による）。

> 弟子たちの教育にたいし、かの人（＝ピュタゴラス［中西注］）はかように心づもりしていたからには、若者

が推参し入門を願っても、すぐさま承諾しようとはせず、その前に試験を課してまず尋ねたのは、両親ならびに他の家人といかにくらしてきたうえで、推参の次第に相なったのか、次に観たのは、笑うべきときではないのに笑わないか、沈黙をまもれるか、分を越えてしゃべりすぎないか、さらにその欲求はいかなるものか、若者が交際している弟子は誰か、その弟子にたいする接し方はどうか、とくになにをして一日を過ごしているのか、なにに喜び、悲しむのかなる諸項。加えて観たのは、若者の姿、歩き方、起居動作、これらを魂のなかの見えざる性格の、眼に見えるあらわれとして、本性のかかる徴によって性格を判じた。かようにして選抜した若者を、必定、三年間放行し、その間に意志堅固と真の好学心の点でどうか、名声にたいしては、名誉を軽蔑するほど十全に心構えができているか否かを試した。次に、秘儀の制定者らもわれらに明かしているように、他のいかなる自制よりもこれ、舌の支配が難しいとして、入門者らに五年間の無言戒をさらに課し、克己心の点でどうか試した。

ピュタゴラスは入門を願う若者に対して、さまざまな角度から、学問するにふさわしいか否かを身体面、精神面の両方向から吟味をおこなう。ピュタゴラスの門に入ろうとする者は、上記引用テクストが示しているとおり、いくつかの段階において、問いや観察をつうじて慎重に試験される。入門を志す者は、まずは家庭環境についての質問をうける。親や家人とどのように暮らしてきたのかは、その人間を形成する大きな要素として重視される。二番目には、「沈黙をまもれるか」、「しゃべりすぎないか」という自制心、さらには、姿や起居動作など外面的な側面が観察される。三番目には、真に好奇心を有しているかどうかを試すために、三年間放行させられる。それは、ピュタゴラス門下で学ぶことの願いが本物であるかどうかを知るために、いったん、その場をはなれて、その学問への思いや願望を放ってやって、時の試練にさらされる。それでもなお、学びを志す者に対して最後に、かの有名な「五年間の無言戒」を課す。基本的な素養としての、「沈黙をまもれるか、分を越えてしゃべりすぎないか」が初期の段階で観察されたように、仕上げの段階においても同様に入門者に試される。「秘儀の制定者」（＝ピュタゴラス）が、「他のいかなる自制よりもこれ、舌の支配が難しい」、と強く認識していることに注目したい。「舌の支配」、つまり、「しゃべりすぎない」ことがなによりも困難なことである、との自覚がみられる。「しゃべりすぎない」とは、裏を返せば、「沈黙をまもる」、すなわち、「聴くこと」に特段の注意をむける、ということを意味する。「聴くこと」は実際、もっとも難しく、最後に五年間もの「無言戒」、つまり、「分を越えてしゃべりすぎない」、「沈黙をまもる」、語られることに対してしっかり「聴く」、というたぐいの修練が課せられるのである。五年間ものあいだ、「沈黙をまもる」実践は、一見、誇張された表現のように思われる。それは、常人では、とても到達などできそうにない修練であり、現実的ではない実践とみなされるとしても無理はない。しかし、「無言戒」は、克己心の養成だけを目的としたものにとどまるものではなく、聴覚こそが、ロゴスを受け入れることができる感覚である、という見たてがあったゆえの修練形態であったのではないか、とわれわれは考える。聴覚には、語られたことを聴覚イメージとして記憶したのち、それを吟味し理解し、すでに記憶されている別のもの（聴覚イメージ）と連関させことによって、ものごとの理（ことわり）を構想（＝想像・創造）するような側面、すなわち、聴覚自身にロギコス性が機能する特質がそなえられている、という見方がある。他方、聴覚によって受動的な面が増幅し、聴く者を狂わせてしまう、パテーティコスな面があることは、すでに指摘されたとおりである。ピュタゴラス学派の「無言戒」の実践の目的は、聴覚にはそのような両義的な本性がふくまれていることを、十分に知悉していたからこそ、聴覚にひそむパテーティコス性の危険に警戒しつつ、「聴くこと」の実践をつうじて哲学を志す者のロギコス性を鍛えることを旨としたものと解される。

さて、「聴くこと」によるロギコス性の養成といった実践は、いったいどのようなものを指しているのだろうか。この問題を考えるにあたり、先に示した、ヴィーコによる、「クリティカ／トピカ」の図式の反転のこころみ、を再度取り上げて検討してみたい。ヴィーコがいう「新しいクリティカ」（デカルト哲学）に対置される、「トピカ」において、前者は、「真なるもの」の探究および、その真偽の判断に視線がそそがれるのに対して、後者（トピカ）は、「真なるもの」ではなく、むしろ「真らしいもの」（世の中には「真らしいもの」が満ち溢れている）をつうじて、共通感覚（賢慮）を育成することに重きをおいている。クリティカが知識や学識といったものを重視する一方で、トピカは、さまざまな状況における複数の考え方や視点や論点（トポス）、あるいは、一見したところ、些細なことのように見えるものに注意を払う。それは、「遠く離れた相異なっている事物において類似的関係を見る能力（ヴィーコ、1987a、42 頁）」、すなわち、「インゲニウム（ingenium）」とヴィーコが呼んで

いる知性のことである。ところで、この構想力ともいうべき能力、「互いにはなれたところにある相異なることどもをひとつに結合する能力（ヴィーコ、1987b、119頁）」は、聴覚や「聴くこと」の実践といかなる関係にあるとみなされうるのか。その問いに答えるための手がかりとして、記憶力と想像力についてのヴィーコの見解、すなわち、「われわれは記憶していることがらをしか想像〔仮構〕することはできず、また、感覚を通じてつかみとったことがらをしか記憶しない（同書、118頁、傍点は中西による）」、と言明していることに注目したい。ここで言われるところの、「感覚を通じてつかみとったことがら」が意味するものは、「感覚」とは、すなわち、「聴覚」のことであり、そのような感覚を通じてつかみとったものは、「聴くこと」の実践（ロゴスを作動させる実践）によって得られた知恵ともいうべきものであろう。それは、共通感覚をはたらかせ、つまり賢慮をはたらせることによって、「つかみとったことがら」のことを指している、といえよう。そのような実践プロセスにおいて、活用すべき資源とでもいうべきものは、記憶されたものであり、それを活用するということは、想像力、すなわち、仮構する力を作動させるということである。そのような力、能力こそが「インゲニウム」、すなわち、もともと互いに離れていて異なったもの同士をつないでみせるような力である。それは、ヴィーコが、真偽の判定を旨とするクリティカよりも、優先的に取り上げるべき能力であるとする「トピカ」の実践の趣旨である。「真らしいもの」、「論点」（＝トポス）を肥やしにして、それらが語られる（弁論による）ことに、耳を澄ませ（しかるべき方法で聴き）、その聴覚のロギコス性を最大限にはたらかせてやる、このような実践（修練）こそが、「聴くこと」の修練でもある。

おわりに

本稿における主題は、図式的に示すならば、「哲学／レトリック」における両者を隔てる境界（スラッシュ／）を取りはらうために、「声」「聴覚」といった、オーラルの要素を媒介させる方法を検討することを旨とするものであった。古来から根強くわれわれの思考スタイルのなかに入りこんでいる、哲学とレトリックの対立、ひらたくいえば、本物とそれを代用するもの、つまり本物（実物）とその影、本稿の文脈にしたがえば、「本物／言葉（＝レトリック）」、これらを区分けする境界を無効化するための、ひとつの試行を提示するものであった。別のいい方をすれば、「哲学／レトリック」を反転させて、「レトリック／哲学」の姿を示すことの可能性を追求するこころみでもあった、といえる。それは、哲学とレトリックの越境の試行であるともいえるものであった。また、大仰ないい方がゆるされるならば、「思考について思考する」というメタレベルの次元にかかわるものを含意していた。

このような研究主題に対するアプローチとして、われわれは、思考様式における「聴覚的な」因子について着目した。「聴覚」あるいは「聴くこと」という人間の感覚に注目したのは、ミシェル・フーコーが、その著『主体の解釈学』において、古代ローマ期における哲学者たちの主題の中心が、「真実の言説」をいかにして主体化するのかの修練にかんするものであった、という指摘にもとづく。そのような修練は、「真」「真理」、あるいは「善」をみずからの身体のなかに取り入れること、「真」にそった言動を行うことができること、すなわち、「真」「真実の言説」の主体化を実現できること、その方法についての関心が高まっていた、という当時の（１～２世紀の）状況が背景にある。そのような要請（真実の言説の主体化）における修練のもっとも重要である第一歩として、語られることの「聴取」があったことが強調される（聴取のあとにつづくものとして、読むこと、書くこと、語ることの実践がある）。哲学者たちの修練の第一段階に、「聴くこと」が挙げられているのは、当時、口承文化の伝統が根強くのこっていたことによる。本稿におけるわれわれの潜在的な関心は、コミュニケーション・メディアとしての「声」や「文字」のちがいによって（口誦詩、手写本、グーテンベルクの活版印刷術の発明による印刷本の出現以降の長い歴史のなかで）、文字の文化が声の文化よりも優れたもの、つまり、よりいっそう文明化したものである、との一般的な認識を転覆させたい、という動機である（むしろ、声の文化のなかに文化の豊饒性があり、それを現代人（文明人？）は十分に汲み出せていない、との立場に立つ）。本稿では、「話し言葉」が「書き言葉」に先行して存在するもの（後者は前者の代用物）、という認識にもとづいた諸言説（ボルヘス、オング）への参照をへて、「聴覚」や「聴くこと」のロギコス性に注目したピュタゴラス学派の言説（同時に、聴覚のパテーティコス性が孕む危険性に対する最大限の警戒を示す言説）を前景化することをこころみた。これらの諸言説どうしを検討することによって、「聴くこと」と、ロギコス性をヴィーコのいう「インゲニウム」（互いに異なるものをむすびつける能力）との連関性を指摘するにいたった。そのようなこころみは、「○○と△△をむすびつける」実践において。△△じたいが、あるものと別のものをむすびつける能力（＝インゲニウム）を指している

がゆえに、本稿での論旨の展開そのものが、メタレベルという観点からみればある種のインゲニウムを体現している、といえるかもしれない。

注

[1] アーレント（1974）。

[2] 一般に、視覚的なものと聴覚的なものに関する研究において、視覚文化論や表象文化論等が盛んである反面、聴覚文化についての論考は相対的に少ないように見受けられる。コミュニケーション・メディアとしての「声」と「文字」において、現実的には、われわれは文字の文化が優勢な世界に住んでいることは否めない事実である。とくに、15 世紀の活版印刷術の発明以降、文字などの眼にするものが増大しつづけているなかで、現代人は、マーシャル・マクルーハンがかつて『グーテンベルクの銀河系』において指摘したように、感覚のひとつである視覚の比率が高まった文化社会に現代人はいるがゆえであろうか、視覚や表象に関する研究が多くみられる（17 世紀から 19 世紀にかけての観察者の「主体」概念をあつかったものとて、ジョナサン・クレーリー著『観察者の系譜』が詳しい。一方、「音と聴取のアルケオロジー」）の特集[表象文化論学会編（2015）]が組まれたり、近年、「聴覚性」（aurality）への関心も高まっている）。

[3] ミシェル・フーコーによる、コレージュ・ド・フランスにおける 1982 年 3 月 3 日第 1 時限の講義録（377-402 頁）。

[4] プルタルコスの『饒舌について』（1985）は、フーコーは直接的には言及していないが、聴取の意義について詳しい。

[5] ホメーロス『オデュッセイアー（上）』（呉茂一訳　岩波文庫　1971 年　365-366 頁）における、魔女セイレーンの登場くだりを引用する（実際は詩行形式）。

> そのときいよいよキルケー女神は、いろいろ私に語って聞かせ、言うようには、「そちらのことは、そうして万事が片ついたという訳ですが、ではいま私の言うことをよくお聞きなさい、神さまご自身思い出さして下さいましょうが。まず最初に来るのは（魔女）セイレーンたちのいる浜です、この女どもは彼らの棲処へ来た人間を、誰彼といわずみな魔法にかけてしまうもので、もしも知らずにそばへ来て、このセイレーンたちの声をひとたび耳にしたら、もうその人は家に帰って、奥さんにもまた幼い子供らにも取り囲まれて、よろこびあいもできなくなります、セイレーンどもの高らかにうたう声にすっかり魅され（虜になるので。）草原の、彼らが坐り込んでるあたりは、ずっといちめん腐っていく、人間の骨が堆高くつもっていまして、ぐるりは縮んで切れぎれな皮、それゆえ傍を駆けぬけるのです、部下の者らの耳には十分味の甘い蜂蜜臘を温めて捏ねたのを、塗りこめといてね、余人はだれも聞かないように。・・・

参考文献

アーレント、H.（1974）大久保和郎、大島かおり訳『全体主義の起源３』みすず書房。
イアンブリコス（2000）佐藤義尚訳『ピュタゴラス伝』（叢書アレクサンドリア図書館　第四巻）国文社。
ヴィーコ、G.（1987a）上村忠男、佐々木力訳『学問の方法』（岩波文庫）岩波書店。
ヴィーコ、G.（1987b）上村忠男訳『イタリア人太古の知恵』法政大学出版局。
エピクテトース（1958）鹿野治助訳『人生談義（上）』岩波書店。
オング、W. J.（1991）桜井直文他訳『声の文化と文字の文化』藤原書店。
クレーリー、J.（2005）遠藤知巳訳『観察者の系譜　視覚空間の変容とモダニティ』以文社。
セネカ（2006）大芝芳弘訳『倫理書簡集Ⅱ』（セネカ哲学全集６）岩波書店。
中島敦（2008）『中島敦』（ちくま日本文学）筑摩書房。
表象文化論学会編（2015）『表象 09』（特集 音と聴取のアルケオロジー、2015 年 3 月 31 日発行）月曜社。
フーコー、M.（2004）廣瀬浩司、原和之訳『主体の解釈学』筑摩書房。
プラトン（1967）藤沢令夫訳『パイドロス』（岩波文庫）岩波書店。
プラトン（2005）水地宗明、田中美知太郎訳『クラテュロス・テアイテトス』（プラトン全集２）岩波書店。
プルタルコス（1985）柳沼重剛訳『饒舌について』（岩波文庫）岩波書店。
ホメーロス（1971）呉茂一訳『オデュッセイアー（上）』（岩波文庫）岩波書店。
ボルヘス、J.L.（2009）中村健二訳「書物崇拝について」『続審問』204-211 頁（岩波文庫）岩波書店。
マクルーハン、M.（1986）森常治訳『グーテンベルクの銀河系』みすず書房。

（提出日　平成 28 年 1 月 6 日）